

カルマの季節

冬の終わりだった。

2月になると、連日続く寒さやときどき降る雪に飽きてくる。俺はいつまでたっても温まらない手をポケットにいれてみたり、ぱっとしない空を何回も見上げたりしていた。新幹線はとまった。とまった先は、静岡駅で俺の故郷だった。朝、昔の恋人の絵理から「もうすぐ自殺するから」というメールがきていた。彼女とは中学時代から交際を始め、高校3年の春に別れた。原因は彼女の浪人だった。彼女は自分の偏差値圏外の医学部にどうしても進みたいらしく、「勉強に集中したいの」という理由で約2年間の交際を一方的に終わらせた。俺は何も言わずに「わかった、がんばれ」とだけ伝えて、泣いている彼女がいる部屋から出た。

あれから約1年。気がつく俺は大学も塾講のアルバイトも放り出して、静岡へと向かっていた。

大学の同級生のツンコは「こっこを買ってきて」とお土産をオレにメールで頼んできた。こっことは、静岡県を代表するお土産で、丸く黄色いスポンジケーキのことだ。彼女のメールに返信はしなかった。そのときオレにとってツンコは、駅にある過大広告のような存在だった。うっとうしくてたまらない。金髪にコスプレのような派手な服を身にまとっている彼女は、同級生のあいだで「ビッチ」と呼ばれていた。ブランド鞆を日替わりで持ち歩き、学校からは毎日タクシーで帰っている様子から、彼女は「そっちの世界の人」なのではないか、という噂が流れていた。

絵理は俺が会いに行ってから四日後に自殺した。「今切れ口」に身を投げたのだ。

今切れ口は、湖と海が結合する地点で、普通の海よりも水の流れが格段に早い。遠くからでも、潮が勢いよく流れていく音が聞こえるほどだ。今切れ口のすぐ上には、高架がかかっており彼女はそこから身を投げたという。

静岡に向かったあの日、俺は急いで改札を抜け、街へと走った。よくデートで使っていた駅前の喫茶店に駆けつけると、ホットコーヒーも頼まないでぼんやりとこちらを見ている絵理を見つけた。黒髪に赤いニットが映えている。彼女は結局自殺の件には触れずに、自分の好きなアイドルなど、とりとめもない話題をえんえんと語り始めた。途中、自然に笑みをこぼす場面さえあった。白い肌の上にキラキラとした赤ん坊のような瞳が輝く、1年前と全く変わらない、美しい女性だった。俺は自然と頭の中で、静岡の冬の乾いた田んぼ道を彼女と一緒に歩いた記憶を思い出していた。

自殺なんて気の迷いだったのだろう、と安心してた矢先だった。電話で死亡を知らされたとき、ちょうど俺は大学の仲間と焼き鳥屋で乾杯していた。

グラスに入った氷がとけて、カランとおちた。俺はその音を死以外のなにものにも結びつけることができなかった。いわゆる「悲しみ」という感情と真剣に向き合わなければならなかった。

「そうか、死んだのか……そうか」

目の前にある、焦げた焼き鳥が絵理の肉に見えた。仲間がそれをくちやくちやと噛んでいる。そんな光景をぼうっとみながら、今頃絵理は、海流にのって太平洋の真ん中へ向かっているのかもしれない。途中で岩にあたったり、魚に食われたりして、だんだんと海に散らばっていくんだ、と思った。

揃えた靴と一緒に置かれていた遺書には、「それでも好きだった」とだけ小さな文字で書いてあった。

俺はその事実を知ったとき、自殺しようかと一瞬考えた。自分にとって絵理がいなくなることがこんなに痛いことだとは思わなかった。それから一瞬間は死んだように生きた。タバコを一週間で3カートン吸った。食事はカロリーメイトとゼリーしか食べなかった。笑うという動作を一切しなかったので、表情筋が下がっているような気がした。絵理の死がきっかけで、自分の生き方について数日考えさせられた。

二週間後、俺は立ち直った。

もともと1年離れていたこともあったのだろう。町で散歩するカップルを見ても、絵理が好きだったキティのぬいぐるみを見ても、ハートの絵文字を使っても、心が痛むことはなくなった。

バイト先には、抹茶のお菓子を、ツンコには約束通り、こっこを渡した。

「こっこって、ただのスポンジケーキかと思ってたけど、マフィンみたいな味だね」

俺が足早に立ち去ろうとすると、ツンコは馴れ馴れしく話しかけてきた。ほぼ金髪の髪はいつも以上にカールが激しかった。冬なのに露出が激しい服を着ているのにも不快だった。

ツンコは何も知らないから、ずっとこんな感じで笑っていた。

俺の元カノが死んだことは、俺と地元のやつら以外は誰も知らないのだ。

壁にかけてあった柱時計の振り子がゆらゆら揺れていた。俺は時計を指差して、もういかなきゃいけない、と踵を返した。

「本当だ、もう授業が始まっちゃうね！」

またね、とツンコのコロコロした声が聞こえた。

春、寮を出て埼玉のとある田舎に引っ越した。引越し費用はだいたい100万かかった。新しいテレビや、机、ベッドなど家具を全て入れ替えた。すべて自腹だった。これくらいは痛くも痒くもなかった。大学生ながら、バイトやらなんやらで、金には困っていなかった。

風に土の香りがまじるほど、その町は畑が多かった。引越し先のマンションの右側も、誰かの畑だった。俺の部屋は二階だったので、もろに土のにおいが部屋の中に入ってくる。家具が全て届いた後、俺は引越し荷物の整理にとりかかった。お気に入りにはフランス製のロッキングチェアだった。家具屋で一目で気に入って購入した。実際座ってみるとなんともいえないほどの心地の良い揺れを感じた。これは、使えるかもしれない、とふと思った。

作業は夜中まで続いた。大学が春休みでよかったと思った。手伝ってもらおうと仲間を読んだ。一時

間後、玄関でピンポンが聞こえてドアを開けたら、仲間の笠井、ヨシキ、砂沢と一緒になぜかツンコが混じっていた。仲間のひとりが彼女と知り合いだったのだ。ツンコだけ返すわけにもいけないので、俺はしぶしぶ部屋にあらせた。

俺は彼らにアルコールとポテトチップスをご馳走した。酒を飲んだあと、彼らは酔っ払いながら作業を始めた。枕投げを始めるやつもいたし、歌を歌いだすやつもいた。

「おお、相沢、このイス最高だな」

さきほどのロッキングチェアを必要以上に揺らしてはしゃいでいるのは、ヨシキだった。

陽気になった俺たちはコンビニに新たな食料を買いに行った。

「ツンコちゃん、キャバ嬢らしいね」

仲間のカサイがビール缶片手にツンコの肩に寄りかかっている。「上野だよ、歌舞伎町じゃないんだよ、上野」と言いながらツンコはコンビニの袋をがさごそさせた。

「相沢は塾で高校生に英語を教えてるんだってさ〜」と、ヨシキがダンボールを潰しながらツンコに教えた。

「私も塾講できるかな」

コンビニで買ってきたジャムパンを口いっぱいにはおぼりながら、馬鹿な微笑みを見せている。

「先生になったら、みんな私のことすごいって言ってくれるかな」

とクビをかしげている。

「君の夢はなんなの」

興味なさそうに聞くと、ツンコは「卒業して、お嫁さんになって幸せになること」とまた馬鹿な微笑みを返してきた。緑のワンピースから見える谷間が知能の低さを強調していた。カサイがおっぱい、もんでいい？と聞くとツンコは、表情を変えずに嫌だと言った。

春休みが終わり、大学が始まると、カサイは忽然と姿を消した。いつのまにか仲間に加わったツンコと、もともといた仲間のヨシキ、砂沢が学食のテーブルで俺を待っていた。

「あいつ、ヒッチハイクして全国回りたいって、前々から言ってたんだ。一人旅にでたのかもしれない」学食のメニューががらりと変わることもなく、俺たちは各々のメニューを選んだ。ナポリタンとカツ丼、天井とジャムパンが机の上に並んだ。それを10分たらずでたいらげた。ときどき学園祭とバイトの話をした。ツンコはまだキャバをやめていないようだ。

「あたしねえ、お金ないの。キャバしてるのに、なんかちっともたまらないの。でも旅行に行きたいな」

どこに旅行に行きたいのか聞くと、彼女は「しずおか」とつぶやいた。数日後、俺は楽天で「こっこ」を買い、彼女にやった。

「よくわかったねえ〜、私がこっこほしいの、よくわかったねえ〜」

と何も考えていなさそうな間抜け顔で、こっこをむしゃむしゃ食べていた。それがすごく幸せそうな顔をしていた。絵理に似てるなと少し思った。

「でも、やっぱり旅行にいきたいな」

「いつかね」

「静岡の富士山を見に行こうよ」

「……いつかね」

「ありがとう、約束ね！」

約束した覚えなどないのだが、ツンコは一方的に話を終わらせた。これ以外でも、彼女は一人で勝手に話をして、勝手に完結するというパターンが多い。

その後ツンコとは仲良くなった。仲良くなったといってもそういう関係ではない。

俺は彼女にタバコをおしえてやった。

「煙と一緒に空気を吸うんだ」

ツンコは最初げほげほむせた。「肺と喉が痛いよ」と半分泣いていたが嬉しそうだった。

カサイも、よしきも砂ざわも俺もみんなタバコを吸っているから自分も仲間に入れた気がして幸せなのだろう。

夏にカサイは捕まった。

「エルをやっていたみたいなんだ」

とヨシキが教えてくれた。彼はいつも大麻 T シャツを着て、頭にメキシコ人みたいなバンドをまいてい
る。俺はさりげなく誰から買っていたのか聞いた。

「近所の黒人だって……」

みんなで留置所に面会にいこうよ、とツンコが提案したが、それはうやむやになって消えた。俺も含め、みんなできるだけカサイのことを忘れたかったのだろう。自分たちと身近な存在のカサイが捕まったのは、受け入れがたいことだったしなんだか気持ちが悪かった。いつのまにかみんなの口数は少なくなっていた。

「もう、カサイくんかえってこないの？」

ツンコがまっすぐな眼をして誰かに問いかけていた。その問いかけには誰も答えなかった。蝉がじわじわと鳴き始めると、俺はなんとなく罪の意識に苛まれた。

部屋の 2 階から下の畑を見下ろすと、なんの野菜かわからないが大きな葉がたくさん見えた。夏の日差しを浴びて、濃い緑の葉がぎらぎらと輝いていた。自然たちが音もなく、こちらに向かって近づいてくるような感じがする。いつの間にこんなに育ったのか、と俺はタバコをふかしながら考えた。そのときふいにピンポンが鳴った。

「今日、カサイくんにあってきたよ」

麦わら帽子を巨大化させたような帽子をかぶったツンコが、ニコニコして扉のむこうにたっていた。手にはシュークリームの白い箱を抱えていた。

「かれ、笑いきのこを食べたみたいだったよ。おもしろかったよ〜。エルをきめて吉野家に行ったら、店員が全員コマイヌに見えたんだってさ。それで笑いすぎてハイになって牛丼 9 杯もおかわりしたんだって。うけるよねえ〜」

彼女は俺たちに内緒で、留置所にいるカサイと面会してきたらしい。ニコニコしながらとんでもないことを約 5 分間にわたりしゃべり続けた。それは俺にとってあまり聞きたくない内容だった。頭の中で、まばたきをしないまま笠井が、じっとこちらを見ていた。すぐに蟬の泣き声が幻をかきけした。

「おまえ、勝手になにしてんだ！」

拳で彼女を殴ってしまった。メロンを床に落としたような鈍い音がした。ツンコは玄関の柱に頭をぶつけると、糸が切れた操り人形のようにぐしゃりと床へ落ちた。マスカラを塗りまくった眼が、かっと見開いていた。白に近い金髪から血があふれていた。

「ツンコ……」

ゆっくりと手をのばすと、

「あのね」といきなり顔をぐるりと回転させてツンコがまんまるの目でこちらを見た。俺は心臓がとまった。汗が冷たくなった。

「わたしほんとは塾講がしたかっただけなの……」

それをいうと、彼女はよろよろと立ち上がり、棒みたいな脚をかくかくさせながら、ゾンビのような動きをして猛暑の中に消えていった。気がつく俺は、柱についたツンコの血を必死にふきとっていた。そのとき俺は動揺していたが、よくよく考えるとツンコが死ぬ可能性を予測して証拠隠滅を謀っていたのかもしれない。

しかし、ツンコは死ななかった。

彼女は翌日、何事もなかったかのように学校に現れた。そして、「おはよう、あついね」とだけ、言ってお化けのようにすぐに消えた。いつものように、立ち止まって俺と無駄な話をすることはなくなった。それから数ヵ月俺とツンコは距離を置いた。

その後、ヨシキから聞いた話によると、ツンコは英語サークルの男とつきあうことになったという。その男は、有名雑誌のスナップに複数回取り上げられるほど容姿端麗で、学内では有名な男だった。ただ、その雑誌は原宿を舞台にした個性的な読み物であったため、彼の髪やファッションはツンコに負けず劣らず奇抜であった。一度学内で見かけたことがあるが、用途不明な布をいくつも腰に巻いており、頭は野菜のような鮮やかな緑色であった。

「ツンコちゃんのことねらってたのになあ。なんであんなやつにとられちゃったんだろう」

と、よしきはさみしそうに笑った。どうして、距離を縮めようとしなかったのか聞くと、「ツンコちゃんは相沢のことが好きなのかと思っていたから」と即答した。ヨシキがこのあいだの事件を知ったら、どうなるのだろう、と一瞬嫌な気持ちになったが、ツンコはそのことを誰かに話した気配はなかった。

「今年の夏が山場だ」

よしきも砂沢も同じことを言っていた。よしきは、アメリカに 10 ヶ月間留学にいくという。

「俺、国際的に活躍できる男になりたいんだ」

そのために彼はこの半年間、ラーメン屋で必死にアルバイトをし、150 万円貯めた。そのせいで、大学の授業は寝てばかりだった。単位も何個か落としている。

「150 万も？そりゃすごいな」

俺はヨシキを見つめた。

一方、砂沢は大手銀行就職を目指して、夏休みはある有名企業のプロジェクトチームにインターン生として参加するらしい。

「200 倍のインターンが通ったんだ」と嬉しそうに企業のパンフレットをめくっていた。二人と比べると俺はこれといって、なにをするわけでもなかった。インターンも留学もない。結局その夏、俺がしたことと言えば、塾バイトの夏期講習と実家に帰って母親が植えたトマトの成長を見守ったことくらいだった。

帰省中、絵里のお墓を初めて訪れた。

墓はびかびかで、すでに供え物がたくさん置いてあった。俺は絵里の好きだったキティのぬいぐるみを横に置いて、線香に火をつけ、手を合わせてみた。

人は死ぬと墓に入るのか、と改めて感じた。よく見ると墓石の後ろに白いキノコが 3 本生えていた。見たことのない不思議なキノコだった。それがどうしても彼女の手にみえてしかたがなかった。彼女が、「おいでおいで」しているように見えた。後ろにだれかの視線を感じて振り返ったが、だれもいなかった。額から汗がたつって、目にしみた。

「もう帰るのか」という家族の声を振り切って、予定よりも早く東京に帰ることにした。静岡から帰る途中、新幹線のホームにあるキオスクに目がとまった。「こっこ」が山積みになって、俺のほうを見ていたのだ。やけに鮮やかなその黄色が鼻についた。

九月の終わり、アメリカにいるヨシキから一通の手紙が届いた。パソコンのメールで送ればいいものを、わざわざ外国製の便箋で送ってきた。変な切手が必要以上にたくさん貼られている。しかし、肝心の住所は書いていなかった。

「相沢、日本で元気にやってるか？俺は留学生活が楽しくてたまらないぜ。毎週パーティで踊ったり、ピザを食べたりしているよ。英語も少しずつだけどしゃべれるようになった！アメリカ人とカナダ人の友達がたくさんできたんだ。ただ、女の子は無理！こっちで東洋人の男は全くもてないよ！まいったよ！……省略」

「あいかわらず呑気なやつだ」

おかしすぎて笑ってしまう。しかし、心のそこから出てきたものではない。

猛烈なスピードで夏は通り過ぎていった。

蝉の声がいつのまにかやみ、トンボが飛び始めている。

その頃、俺はやっとツンコとなにごともなく話せるようになった。俺の家の近くにある公園には、彼岸花が狂ったように咲き乱れていた。久しぶりの再会だ。予想外に俺は緊張していた。5 分早く待ち合わ

せ場所の公園へいくと、もう彼女は着いていた。ベンチに座って手を振っている。

ツンコの近くに座ると、彼女の変わりようを間近で見ることができた。

ツンコの金髪は夏の日差しによって水分を奪われ、枯れた樹木のようにすかすかになっていた。

「別れたい……」

彼岸花と俺を交互に見ながらツンコはぼつりつつぶやいた。ひどく元気がなかった。以前の彼女なら嘘泣きをして俺の気をひこうとしただろう。しかし、今のツンコには泣く気力も悲しい顔をする気力もおきないらしかった。彼女の頬はこけ、がりがりにやせ細っていたのだ。白目は黄色く濁っていた。俺が、なにかひどいことをされたのか？と聞くと、彼女は原宿男の愚痴をえんえんと話し始めた。

「ノブ（原宿男子の名前）、原宿ばっかりいくの。カフェが好きらしくて、毎週カフェに連れていかされるの。あと、ラフォーレの前にずっと居座って、スナップ隊が来るのをえんえんと待ってるの……疲れちゃう。」

俺は、「そうか。カフェとラフォーレばかりのデートはきついよな」、としか言い返せなかった。俺は少し考えて、ポケットの中を探った。彼女を少しでも元気にするためにキャンディをわたした。

「ありがとう……」

彼女は骨ばった指でキャンディの袋をあけると夢中ではおぼり始めた。

「おいしい、これおいしい……ありがとう、相沢くん、ありがとう」

頭の中で絵里の悲鳴が聞こえたような気がした。それから時計の針の音も聞こえてきた。もう俺には時間がない。ツンコがダメになってきているのは確かだ。彼女を救うのは今しかなかった。しかし、俺はキャンディをあげてうやむやにしまった。

「お金がないの」

ツンコは腐った魚のような目で、俺のほうを見てくる。俺は無言で、近くに咲いていた彼岸花をぽきりと折った。

冬になるとカサイから意外な悩みを聞かされることになる。

「面接が……うまくいかないんだ」

大手銀行の面接や説明会に脚を運ぶと、どうしても緊張がとれなくて面接で失敗してしまうのだという。

「なんか、俺だめなのかな。震えがとまらなくて。面接官が妖怪の目玉おやじみたいに見えるんだよ」

夏に銀行の長期インターンに参加して自信もつけたはずなのに、おかしい、おかしい、と頭を抱え込むカサイを見て、俺は就活の残酷さをぼんやりと知った。

「目玉おやじなら怖くないだろ。むしろ笑えるじゃないか」

とふざけてみせても、カサイは全く笑ってくれなかった。

アメリカに留学に行ったヨシキは、後期から授業に復帰するはずだった。しかしいつまでたっても学校には来なかった。連絡もあまりなかったのも、またあいつも警察に捕まったのかと一瞬考えたが、違った。久しぶりに彼に呼び出されて新宿まで脚を運ぶと、別人のようになったヨシキがそこにいた。彼は耳に10個、鼻に3つ、眉間に1つピアスをあけていて、ラッパーみたいなだぼだぼの服を着ていた。なぜか頭が毛糸のようなカラフルなドレッドになっている。

「俺は国際的な DJ になるんだ。本場（アメリカ）で学んだ英語を生かしてでかい男になってやるぜ」

「おまえ、DJ になるのが夢だったっけ？」と聞くと、彼は狂ったように身振り手振りをして DJ に対する熱意を俺に伝え始めた。何を言っているのか理解するのに苦しんだが、彼の話のを要約すると、「六本木のいきつけのクラブで踊っていると白人が寄ってきた。その白人と英語で会話するうちに仲良くなって、『うちの店にきて DJ をやらないか？』と誘われた」、という。その店は都内でも有名なクラブらしく、こんな機会は滅多にない、とヨシキは金属のピアスがゆれるほど鼻息を荒くして言った。彼も白目がツンコ以上に黄色く濁っていた。

「マジだぜ、俺はマジ本気だぜ。超ビッグな DJ になって、イベやって客も金も女もみんなゲットだぜ！ゆるキャラにもなるぜ！サンキュー！」

「そうか……じゃあ、よろしくやってくれよ」

俺は机に 1 万円だけ置くと、店を去った。彼が踏み込んではいけない領域にふみこんでいってしまったているのは一目瞭然だった。

一ヶ月後、ピアスを何個もつけたバラバラ死体が公園で発見された。

しかし、死体の特定はできなかった。血がすべて抜き取られており、指紋もすべて酸で溶かされていた。また、頭だけが見つからなかった。プロの犯行としか考えられないほど完璧に死体は処理されていた。

それから数ヶ月後、俺は更なる重大情報を耳にする。

いつものように学食でカツ丼を食べていると、見知らぬ男が青い顔をしてこっちに向かってきた。

「君はなに？」

不審に思い尋ねると、男は「斉藤伸幸」と名乗った。俺は名乗った瞬間、ぴんときた。彼はツンコの言っていた原宿男、つまりツンコの彼氏だ。

「おまえ、……ツンコになにふきこんだ」

ノブは焦点のあわない眼でこちらをみている。なんのことも落ち着いて尋ねると、ノブは学食の白い机をがんと叩いて叫び始めた。

「あいつから性病がうつったんだよ……俺の顔みりゃわかるだろ、ツンコは売りやってんだよ」

たしかに彼の顔にはピンク色の大きさの違う円形の模様がたくさんできていた。手や脚にはブツブツとしたイボのようなものができていた。ノブの肌には脂汗がびっしりと張り付き、胸は激しく上下しており、彼の鼓動の早さと恐れを象徴していた。

「ツンコは…あいつは俺とつきあってから三日後にそっちの世界に脚をふみいれてた。タダの病気じゃない。治療方法がないんだってよ……腹から下が痛くて痛くてたまらないんだ！変な熱も出るし、顔の斑点も……」

「だからって、どうして俺のところにくるんですか。」

カツ丼をむしゃむしゃ食べながら聞き返すとノブは変な唸り声を出して怒り始めた。

「ふざけんな！てめえが売りやれつつったんだろ！俺は全部知ってたんだよ！」

「え……？なんのことを言っているんですか？落ち着いて話し合しましょうよ。」

その言葉を聞くとノブは込み上げた感情とショックを抑えきれず、目の前で嘔吐しはじめた。顔が日本ザルのように赤くなっていた。俺はとっさに彼のゲロを避けた。遠くで「キャア」とかいう声が聞こえた。

俺は他人のふりをしてその場を軽やかに去った。彼の脂汗が俺の額にうつったようだ。汗がとまらない。キャンパスのベンチに座って、コーヒーを飲んでみた。回りの景色が頭にすんなりはいつてこなかった。高いヒールを履いて肩を並べて歩く女たちも、カレーパンをほおぼる運動部のやつらも、下をむいてコンビニから出てきた教授も、すべて別世界のものに感じた。どうしてこんなことになってしまったのだろう……もっと、うまくやっていけたはずだ。俺は深いため息を二時間ほどついたあと、もう自分は流れに任せるしかないのだ、と結論づけ家へ帰ることにした。

カフェ男とはそれ以来コンタクトをとらなかった。そしてとることもできなくなった。彼は入院したのだ。都会から離れた田舎の緑あふれる療養所だ。毎日母親が彼の好きだったカフェの焼き菓子やコーヒーを届けに来ると言う。彼がまた原宿のおしゃれカフェに出向ける日は来るのだろうか。

そんなこんなで、俺の周りのやつはいなくなった。

どうしてみんなこんな簡単にくたばってしまうのだろう、と思う。他の人間と比べて俺の心が少し鈍っていることは、けっこう昔から知っていた。ジブリ映画を見たり、戦争のドキュメンタリーを見たりしても俺の心は、絶対感動しなかった。どうして他人の出来事に対してそんなにも感情移入できるのかわからない。人間の業という言葉は、後ろめたさから生まれたものなのかもしれない。やつらはその「業」の重さに耐えられずに潰れていったのだろう。自分はそうならないという自信があった。無駄な感情は、仕事の能率を下げるだけだ。俺は黙々とやるべきことをこなしていった。

そして、4年の夏には大手商社に内定が決まった。

砂沢はよしがなくなったショックで一時期落ち込んでいたせいもあり、面接が最後までうまくいかなかったせいもありで、希望の会社に入ることはできなかった。

四月から働く会社は東京都心にあるため、引っ越しが必要だった。冬休みになると不動産をチェックしはじめた。かつての仲間に遊びに誘われることはなくなった。そのかわり同じ内定先の友達が何人かできた。その友達の紹介で出会った女の子とつきあうことにもなった。2月には彼らとスキー旅行に行く予定だ。

しかし、ツンコはそんな俺を許してくれなかった。

休みに入ってから一週間に一、二回着信があったし、長いピンポンも何度か聞いた。俺はそれをすべて無視していた。ピンポンピンポンピンポンピンポンになっているのを、息を殺して聞いているのは苦痛以外の何者でもなかった。

夢にも彼女はでてきた。夢の中の彼女はいつのまにか俺の部屋に入ってきている。鍵をかけたのに、おかしいなと夢の中の俺はぼんやりと考えている。それにしても、夢の中の彼女は薄い。ダンプカーで轢かれたようにペラペラで細くのびているのだ。声もかの泣くような声しか出ない。箆笥とテレビの隙間に入って、こちらを見ている。しかし、よく見るとそれはツンコではなくて、絵里だったのだ。

「絵里……」

朝起きると汗をびっしょりかいていた。すべてがうまくいっているはずなのに、心が果てしなく重かった。こんな気持ちになったのは、今までにないことだ。家具と家具の隙間をすべて確認してみたが、彼女はいなかった。泣きたくなった。これも久しぶりのことだった。泣けるかと思ったが、涙は出てこなかった。頭がものすごく痛い。小人が頭の中で木琴をガンガン鳴らしているようだ。携帯を見ると、常に電話の画面になっていて、「ツンコ」という三文字が並んでいる。

その夜、俺はついに彼女の誘いに応じた。自分でもよく決心したと思う。きっかけはとくにない。出かける前に、部屋の窓を開けて深呼吸した。風に畑の土のかおりがのってきた。そして、土の香りを背に、かつての仲間と部屋で大騒ぎしたことを思い出した。あの頃はカサイもヨシキも砂ザワもツンコも元気だった。

この夜だけではなく、俺は道中通りかかった畑の土のかおりをかぐとあの春の日のことを思い出すのだった。

ツンコも俺とおなじようなものだった。

「ストループ効果」

馬鹿だと思っていたツンコが思わぬ言葉を口にした。

「相沢くん！」

待ち合わせ場所に5分早く行くと、やはり彼女はすでに到着していた。

「会いたかった……」

ツンコは骨ばった頬からこぼれる涙をふいた。

「俺もだよ」

ほぼ抜けてしまった彼女の髪をなでた。するとまた髪の毛が5本ほど抜けた。

夜中の公園で、ブランコを漕ぎながら彼女はぼつりぼつりと話し始めた。

「こっこのにおいをかぐと、相沢くんのことを思い出すの……そのうち、こっこじゃなくて、こっこ以外のお菓子のにおいをかいでも相沢くんのことを思い出すようになってしまったの……」

「相沢くんのが好きなの」

ガリガリにやせ細り、性病に犯された彼女はブランコをきこきこして涙をぼろぼろ流していた。俺は少

し考えて言った。

「君は間違っているよ」

ツンコは真っ赤な眼でこちらを見つめた。

「君はこっただけで俺を思い出しているわけではないだろう？」

こっただけじゃないはずだ。俺が君にあげたもの、酒からジャムパン、タバコや慰めに渡したキャンディまで、すべてに俺を「思い出す要素」は練りこまれていたのだから。

ツンコはポカンとしている。

「コカイン、て知ってる？」

俺はツンコの手を潰れるほどぎゅっと握って聞いた。彼女は次第に震え始めた。

「俺が、君のジャムパンやこっこに注射器使ってコカイン混ぜてたの、知ってる？」

もう全部話してしまおう。

そう決めたのは「ついさっき」だった。カモにこういう話をするのは今までなかったのだが、特別にツンコには最後に話すことにした。

「え？え？よくわかんない……コカイン？」

「そう。コカイン。麻薬なんだけど、知ってるでしょ。小学校とか中学校のときにやったでしょ。ダメ、絶対！ってやつ。ただ、ふつうに飲ませてたら警察とか周りにすぐ嗅ぎつかれるから、俺の場合洗脳をかけて、薬をキメている記憶を君の頭から消してたんだけどね」

人を洗脳することは意外と簡単だ。

合図さえ決めておけば、記憶を忘れさせることができた。俺の場合、それは振り子だった。「何かが、揺れる」のを見ると麻薬を使ったことを忘れさせるように暗示をかけた。用意したロッキングチェアに、時計の振り子、キーホルダーや、ピザから落ちかけているチーズまで、さまざまな要素を駆使して「彼ら」を洗脳した。

当然「彼ら」には、ツンコだけではなく砂沢やヨシキ、カサイも入っている。

「嘘だよ……」

「嘘じゃない。君、鏡で自分の顔をみてごらんよ」

ツンコは公衆トイレの鏡に自分の姿をうつした。ガリガリで眼球が黄色く、赤い斑点だらけの浮浪者のような女が映っていた。

「君は麻薬ほしさに風俗をしたんだよ。キャバクラ勤務じゃ支払いが追いつかなかったんだ。覚えてないのかな？それ、性病だよ。」

正確にいうと、麻薬の副作用と性病の症状を併発している、だ。

ツンコは少しずつ洗脳が溶けていったらしく、いやだ、やだ、と髪の毛を掻き毟りながらキョロキョロし始めた。

後で聞いた話によると、ツンコは普通の風俗をしていても金が足りなくなり、ある金持ちに身を売ったという。そいつの趣味は俺でも想像を絶するほど異常であった。自慢のペットの相手をツンコにさせたのだ。それは、大型のチンパンジーであった。ツンコは夜な夜なチンパンジーの相手をして、巨額の金を受け取った。しかし、代償は大きかった。やがて 40 度を超える高熱と顔の斑点、イボが表れ始めた。

病院で検査したところ、彼女の膣の中には黒い虫がびっしりと張り付いていた。それは日本の虫ではないことは確かだが、どこの国のものかはわからないという。高圧の洗浄をかけたり、ピンセットで無理やりひっこむいたりしたのだが、虫はとれず、彼女の膣はぼろぼろになったという。

俺が麻薬売買で集めた金は億にとどかないくらいだ。しかし、そのすべてが警察に見つからないでいる。それは後ろの大きい組織が俺をバックアップしているからというのもあるし、なにより「証拠を残さない」をモットーに仕事をしているからだ。

「カサイが捕まったときは正直まずい、と思ったけど、俺のチームと違う売人から買っていたらしいから安心したよ。でも、君がカサイのところにお見舞いにくとか言った日には、本当にはらわたが煮えくり返りそうになったね。マジでぶっ殺してやろうと思った。シャブ漬けのおまえがひょこひょこ留置所なんか行ったら危ないからな。それで、あのときか一っとなって殴ってしまったんだよ」

しかし、ツンコは女だったせいもあり、男よりは資金がつくれるカモだったため、始末するには早いと思った。俺は彼女の様子をもう少し見ることにした。

一方、自称 DJ の馬鹿ヨシキは俺と違う売人から薬を買い始めたので、手を切ることにした。また彼は、アメリカに留学には行っていない。「行った」という暗示と、留学代を俺に渡すような暗示をかけておいたのだ。その期間六本木のクラブで働かせた。たくさん働いて、たくさんクスリを買ってくれる彼は俺にとっても組織にとっても、「優等生」だったのだが、いわゆる留学期間中に違うチームの売人と出会ってしまい、惜しくも死んでもらうこととなった。

一方、砂沢はもともと金をあまり持っていないため期待はしていないが、彼の性格が一番洗脳しやすかったのでキープすることになっている。

「やつはするめみたいなもんだろ」

噛めば噛むほど味が出てくるさ……と同僚の売人は語る。

「ツンコ、俺は君のことを愛してしまったみたいだ」

俺はポケットから出した包丁をご当地キティのハンカチで拭きながら、淡々と説明した。同じくシャブ漬けにされて自殺した絵里が買ってくれたハンカチだった。

「愛って何か、わかるかな？」

歯をがちがちさせたツンコは、首を横にふった。

「殺すことを躊躇することだよ」

君には難しすぎたみたいだね、と近くに落ちていた木の枝を、ツンコの白い耳に押し込んだ。メリメリっと音がするとツンコは泣き叫び始めた。耳についていたハートのピアスがいきなり血まみれになった。

「カモの君を好きになったことが大きなミスだった」

ツンコはひきつけをおこしたかのようにむせび泣いた。しかし、いくら大きな声で泣こうが喚こうが俺には関係なかった。ツンコは俺じゃない何かを見つめた。遠くで揺れているブランコだ。きっと、「ああ、こんなところにも洗脳の合図が隠されていたのか」と考えていることなのだろう。

「俺は、一回麻薬の売人をやめようと思ったんだ。長年付き合っていた女が死んだとき、俺の良心なるものが傷んだ。別にその女が直接俺に薬を売るのをやめろ、と言ったわけではないさ。ただそいつもシャブ中で狂って自殺しただけだけど。でも、そのとき俺は、もうこんなことするのはやめよう、と生

まれて初めて思えたんだ」

でも、結局やめられなかった。なぜか逆にエスカレートしてしまった。他大学や学校の先生、バイト先の同僚にまで薬を売り始めた。もちろんツンコもそのひとりだ。

「シャブ漬けになった人間というのは、最後は必ず墮落していくんだ。君ももちろん同じようになったんだけど、俺にとっては違った。君をシャブ漬けにしたことをいつの間にか後悔していた。」

ツンコが風俗をしているという噂はとっくの昔から知っていた。そして、それが薬漬けの女の典型的な出世コースだということも十分わかっている。しかし、何人もの男を相手にしている彼女を想像すると耐えられなくなった。俺はチームのボスに電話をかけて「もうあの女はつかえないから、売るのはやめよう」と懇願したこともあった。しかし、その願いは当然のように跳ね返された。チームの掟は厳しく、カモは骨までしゃぶりつくして自殺させる、使えなくなったら殺す、の二択しかなかった。ボスは知らない間に「チンパンジー男」にツンコを売るように他の売人に命じていた。最期までツンコの身体を酷使し、金に変えるつもりだったのだ。

「相沢くんは、彼女さんが死んだときにどうして売人をやめようと思ったの」

覚悟を決めたのか、ツンコは思わぬ質問を投げかけてきた。俺は少し考えた後、小さな声で答えた。

「……悲しかったから」

ツンコは「そう」と言ったきり、黙ってしまった。

「私が死ねば、こんどこそ相沢くんは辞めてくれるのかな……」

その言葉に、俺は心臓をえぐられたような気持になった。とにかく、お前は死ぬんだ、とナイフをふりかざそうとすると、ツンコは、待って！とナイフをかわした。

「殺す前にあなたに見せたいものがあるの」、と言って俺の手を握り、歩き始めた。俺は彼女の指を4本いっきに切り落とした。血が吹き出ると同時に、彼女が谷底に落ちていくような長い悲鳴をあげた。

「時間がないんだ。はやくして」

泣きながらツンコはまた歩き始めた。鮮血がぼたぼた地面に残った。こんな時でさえ、この血痕は女を殺した後にかたづけるべきか否か、と俺は職業柄考えてしまう。

公園の後ろにある竹やぶの中にがさがさ入っていった。

「こんなところはいるの？ だるいなあ」

俺はツンコのアキレス腱を持っていたニッパーでチョキンと切った。茹でたササミを切るような弾力的な感触だった。ぬるぬるした白いうどんのようなものを飛び出させながら、彼女は片足で進んだ。暗闇の中で無我夢中になって、竹の間を通り抜けていく。しばらく進むと、開けた場所に出た。ツンコは指のない手で地面を掘った。すると、しゃれこうべがでてきた。

「これ、私のお母さん」

ツンコ的笑顔は痛みでひきつっていた。

緑色のしゃれこうべはどう見ても人間ではなく、動物のものだった。おそらく野良犬のものだろう。

「は？ 意味わかんないよ」

俺は棒読みで答えた。といいながらも、涙が出てきた。それは、思ったほど温かくはなかった。とうとう彼女も俺も狂ってしまったようだ。守り続けてきた自我が崩壊していくのがわかった。もう終わり。

すべて終わり。映画のラストシーンを見ているような気持ちだ。

チンパンジーに犯された彼女を始末するように命じられたのは、5日前だった。俺は最後までそれを断った。まだ、彼女は使えるんだ、まだ、大丈夫だから殺さなくてもいいと。ボスは「それなら映画スターにさせるか」と提案してきた。映画スターとは、スナッフムービーのことだった。ツンコは生きながら拷問され、それを映画にされるのか、と思うと総毛だった。

「日本はあまり需要がないからな、アメリカのオタクどもに売りつければいいさ。日本人の女は童顔だから高く売れるぜ」

そんなふうにされるくらいなら、自分の手で殺すしかなかった。たとえ彼女を逃がしても、必ず「組織」は見つけ出して拷問をかけて殺害するからであった。

彼女の首を絞めた。

絞殺するのは初めてであった。いつもはバラバラにするのだが、そのときの俺には、もうこれ以上彼女を切り刻むことができなかったのだ。

彼女は俺に「身体を売ってごめんね」と言った。俺の心を見透かしているようだった。

三分後、彼女は絶命した。眠っている彼女の顔を見るのがつらかったので、俺はそっと自分のシャツを彼女の顔にかけた。急にあたりが真っ暗になった気がした。もともと夜中なので暗闇だったのだが、さらに黒が増した。初めて彼女を抱きしめてみた。冷えた餅のように重かった。ふいに電話がかかってきた。「死体処理屋」だった。殺したかどうかの確認の電話をかけたのだ。死体処理屋は、死体をばらばらに切り刻み、血をぬいて加工するプロだった。俺は「死体は自分で始末するから手をつけるな」というといったん処理道具をとりに帰宅した。

急いで戻ると、もうレインコートを着た「死体処理屋」が複数到着していて、「彼女」を解体していた。俺は、「やめろ！」とチェーンソーを振り回す彼らをとめようとしたが、チェーンソーの取っ手で殴られた。

「ボスがやれっていったんだよ。証拠は残さないのが俺たちのやり方だ。おまえは次の仕事でも探してろよ」

死体処理屋のチェーンソーが上下するたびに、ツンコの指や内臓が飛んできた。処理屋の一人は面白がって、腹から上のないツンコの死体を犯していた。

「おまえ、性病がうつるぞ。その女は性病だぞ」

一人の処理屋が注意すると、マジですか！と言って、性器を急いで抜くと、ゴミを捨てるように、ツンコの死体を放り投げた。低い放物線を描くと、ぐしゃりと水々しい音を立てて地面に叩きつけられた。さらにそれを革靴で勢いよく処理屋が蹴った。貝殻がつぶれるような音がした。蹴ったところは皮膚が裂け、破れた障子のようにになっていた。

すでに彼女の胸や内臓は袋に詰められていた。この後死体は車で運ばれ、専用の処理場にある臼ですり潰して跡形もなくするのだ。骨も脳みそも内臓も全て、全てだ。

「これは、俺が処理しますから……」

俺は、彼女の頭部を持ち去った。

「おい！相沢、なにしてるんだ！」

怒鳴り声が聞こえたが、振り返らなかった。走った。

処理屋の車に勝手に乗り込み、ツンコの頭を助手席におき、エンジンをかけた。怒り狂っておいかけてくる処理屋を無視して猛スピードで現場を離れた。

まともな運転にならなかった。ふらつきながら、なんとか大通りまで出ると高速道路へ向かった。目的地は、なかった。

途中でコーヒーを買い、高速を猛スピードで走った。走っている途中、ツンコが何回も助手席からゴロンと床へ落ちてしまうので、そのたびに拾い上げて元の位置に戻した。自分は、何をしているのだろう、と思った。こんな行動をしたら後で「つけ」が回ってくるのはしっかりと目に見えている。

バックミラーを見ると驚くべきことにみたこともないほど醜い怪物が映っていた。血まみれの自分だった。間違いなかった。

これからもうこうやって生きていくのか？

「ごめんな……君を旅行に連れていけなくて」

もう二度としゃべることのないツンコに話しかけた。既にハエがたかっており、目や耳や鼻を占拠していた。彼女は腐っていた。

2時間後、俺は警察に出頭した。

血まみれの頭部をもって現れたとき、彼らは驚いていた。そのうち、親にも連絡が入り、俺は逮捕され、世間的な大ニュースになるだろう。俺はかなりの確率で「死刑」になり、ボタン一つで絞首刑にされるだろう。

どっちにしろ、俺の命はない。

「組織」は必ず俺を殺しにくる。想像ができないほどの残酷な手口で。「裏切り」はチームの掟の中で一番の重罪であった。刑務所に入っても関係ない。絞首刑のような楽な死に方など、彼らの殺人マニュアルの中にはのっていないのだ。それほど俺の組織はヘビーデューティーなやつらが多い。監視の目をかいくぐって、ムショに入り込むなど、彼らにとっては朝飯前なのだ。そして、俺が捕まっても、殺されても、「完璧な彼ら」は逃げ続けることだろう。

ふとまだ血がついている腕時計に目をやった。

「彼ら」がくるまで、そんなに時間はかからないと推測する。

刑務所に入ると、畑仕事はさせてもらえるのか後で看守に聞いてみよう。

俺は最期の最期まで、彼女たちのことを思い出して苦しんでいたいのだ。

「午前4時10分7秒、相沢規和を逮捕。」

揺れる手錠を見つめた。

End.